

2025 年度

海外帰国生 入学試験

国 語

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 放送の指示にしたがって、問題冊子に受験番号・氏名を記入します。
次に、解答用紙の指定された場所にQRコードシールをはり、受験番号・氏名を記入します。
3. 試験時間は45分です。
4. 問題は、1ページから14ページまで印刷してあります。試験が始まったら最初に確認し、足りないページがあったら申し出てください。
5. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
6. 試験が終わった後、問題冊子・解答用紙とも回収します。
7. 記述問題では、指定された字数の8割以上は書いてください。ぬき出し問題では、指定された字数で答えてください。どちらの場合も、句読点やかぎかっこなどの記号も字数にふくまれます。

共立女子中学校

受 験 番 号	氏 名
K	

1 次の1〜8の――線をつけたカタカナを漢字で、漢字の読みをひらがなで書きなさい。

1 先生はどうにもナツトクしていない様子だ。

2 生活にゆとりができたので、将来のためにヨキンすることにした。

3 やぶからボウにそんなことを言い出されても困る。

4 委員長のシュウニンあいさつは熱意があつて印象的だった。

5 ケワしい山道を登ると、急に視界がひらけた。

6 優勝を祝う垂れ幕を校舎にかざろう。

7 二人の議論を遠巻きに見ている友人たちに声をかけた。

8 初節句のお祝いに祖父母からひな人形がおくられた。

2

1と5の俳句の□に入ることを、後のア、エからそれぞれ一つ選び、記号を書きなさい。

1 □ が香にのつと日の出る山路かな

まつおばしろう
松尾芭蕉

ア 松 イ 梅 ウ 草 エ 杉すぎ

2 □ の花や月は東に日は西に

よさぶせん
与謝蕪村

ア 夏 イ 菜 ウ 湯 エ 夜

3 雀すずめの子そこのけそこのけお□が通る

こはやしいっせ
小林一茶

ア 馬 イ 猿さる ウ 鷹たか エ 車

4 いくたびも□の深さをたずねけり

正岡子規

ア 池 イ 谷 ウ 眠りねむ エ 雪

5 をりとりてはらりとおもき□かな

いいだこつ
飯田蛇笏

ア さくら イ やなぎ ウ すすき

エ きく

3

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

注¹ フィレンツェのアカデミアに通っていた頃、授業が終わると、市街地に溢れる観光客たちを避けるために、遠回りをしてアルノ川沿いの道を通って家へ戻るようにしていた。日本はちょうど注² バブルの最中だったが、フィレンツェという街には日本人の団体客をはじめ各国から観光客が絶えることはなく、寒くても暑くても、年中どんな時期にも、世界中からルネサンスの注³ 軌跡を求めて集まった人々で賑わっていた。数日間という限定な期間内で、ガイドブックに書かれた名所を時間の許す限り観て行こうという意気込みに満ち、浮き足立つ楽しげな旅人の中を縫うように歩いていると、ふと、① どうして自分はこんな観光地に暮らしているのだろう、という疑問が芽生えることがあった。

家族や知人の勧めで、本格的な絵画の勉強をするならここしかないだろうとフィレンツェに移ってきたのは17歳の時だったが、それから数年間は日本に戻りもせず、自分のDNAとは一切拘わりの無いこの街に馴染むために、とにかく必死に日々を過ごしていた。フィレンツェという街の良い所だけを観る観光客のように楽しい思い出だけを胸に残して自分の国に帰ることがもう許されないという自覚が、とても重たかった。

その日はそれまで続いていたじりじりとした夏の日差しがやっと和らぎ、見上げた空は、私が幼少期を過ごした北海道を注⁴ 彷彿とさせるような、どこまでも遠く透明感のある青さで、高いところにうっすらとだけ掛かった鱗雲が僅かに秋の気配を仄めかしていた。

緑色にうねる穏やかな川の流れを視界の端に留めていると、そのまま② 真っ直ぐ家に帰るのが勿体無いという気持ちになった。かつてその注⁵ 界限に暮らしていたとされる、注⁶ ボッティチェリとその家族が埋葬されているオニサンティ教会の注⁷ ファサードを向かい側に望む川辺裏で、釣りをしている親子が目に入った。街全体が人の目にさらされる見世物とっていいフィレンツェの街中で、そんなふうに住生活感を漂わせている人の姿がなんとなく嬉しかったし、③ ほっとした。

川伝いの堀の向こうから馴染みのある音が聴こえてきた。岸辺の草の茂みのどこかにキリギリスが潜んでいて、元氣よく羽を鳴らしている。それはイタリアにやってきてから聞いた、④ 初めてのキリギリスの羽音だった。私は堀から下を覗き込んで、その元氣な羽音が響いてくる方向を凝視した。もちろん、そこからキリギリスの姿が見えるわけではないが、私はそんな自分の仕草も含めて、かつて北海道に暮らしていた頃、短い春から夏の期間を毎日虫探しに明け暮れ、時間さえあれば野原や森の中で過ごしていた子供時代を思い出していた。夫を亡くした母はオーケストラの団員で、家にいる時間はほんの僅かだった。夜遅くまで母の帰り

を待つ私の寂しさを注⁸。払拭^{はつしよく}してくれたのが虫の羽音^{はうおん}だった。

フィレンツェに暮らし始めてから、この国の言語だけでなく美術や歴史を学習し、イタリア人の宗教観や倫理^{りんり}、そして彼^{かれ}らの習慣を学び、イタリア人が食べるものを毎日食べ、とにかく自分の中から^⑤異国人であるという負担をなるべく軽減したくて懸命^{けんめい}だった私は、アルノ川の縁^{へり}で懐かしいキリギリスの羽音によって、全身を解^{ほど}されたような心地になった。自分とは縁^{えん}もゆかりもない土地に来てしまったという戸惑^{とまど}いや畏れを払いのけようと我武者羅^{がむしゃら}になっていたところに、キリギリスは遠く離れた日本を呼び戻し、日々の緊張感と孤独感から救ってくれたような気がした。

その羽音は、まだフィレンツェの人々が感じ取ってはいないはずの、夏の終わりを告げていた。虫の音で季節の移り変わりを敏感^{びんかん}に察知するのは、虫の存在が深く人々の生活や文化に関与^{かんよ}してきた日本人の特徴なのかもしれない。私が不自然な恰好で堀の下を覗き込んでいるのが気になったのか、「どうしたの?」と通りすがりの夫人が声をかけてきた。言語が英語だったから、おそらく観光客だろう。「虫の羽音です」と答えると、その人は^⑥その言葉の意図^{いどう}を捉えられなかった不思議そうな表情で、一瞬私と同じように壁^{かべ}の向こうを覗き込んだあとで、何も言わずにその場を立ち去って行った。

イタリア人である夫もやはり虫という生き物には特別な感情を持たないし、むしろ全くといっていいくらい関心がない。私が今でも昆虫図鑑^{こんちゅうずかん}などを熱心に見ていると「君は奇妙^{きみょう}なものに関心があるんだね」と、寒気がするのか両腕^{りょううで}をさする真似^{まね}をする。イタリアでは秋の虫の羽音も日本人のように、キリギリスや松虫、鈴虫^{すずむし}、などといった分類はできない。どれもこれも皆一様に^⑦「コオロギ」という固有名詞で片付けられてしまう。それぞれ微妙^{びみょう}に音が違うからよく聞いてみて、とずいぶんいろんな人に耳を澄^すましてもらおうと試みたが、相手にしてくれたのは小さな子供たちくらいだった。

そんなある日、夫が仕事の帰りに美しいガラス細工のようなイトトンボを道端^{みちばた}で見つけたと言って持って帰ってきたことがあった。「君、好きなんでしょう、こういうの」と素っ気ないが、まだ生きているかのように見えるイトトンボを私の手のひらにのせると「よく見ると綺麗だね」と呟^{つぶや}いた。ふとした時に、この国において終始異国人であり続ける私の育った国の感性を、土地の人がささやかながらでもリスpektしてくるのは、やはり^⑧嬉しいことでもある。

(ヤマザキマリ『扉^{ひら}の向う側』マガジンハウスによる)

注1 ファレンツェのアカデミア Ⅱ イタリアの都市ファレンツェにある国立アカデミア美術学院

注2 バブル Ⅱ バブル景気。一九九〇年頃、一定期間続いた好景気

注3 軌跡 Ⅱ 名残なごり

注4 彷彿とさせる Ⅱ 思いうかべさせる

注5 界限 Ⅱ 周辺

注6 ボッティチェリ Ⅱ イタリアの画家

注7 ファサード Ⅱ 建物の正面

注8 払拭 Ⅱ 消し去る

Ⅰ——線①「どうして自分はこんな観光地に暮らしているのだろう」とありますが、「私」はなぜこのように感じているのですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 短時間ですべての名所を見ようと浮き足立つ人たちの姿があさはかでないやらしく見えたから
イ 楽しそうな観光客を見て、苦勞して異国の生活にしがみつく自分を不思議に思ったから

ウ かつてとちがい、観光客が多く落ち着きがなくなった街の様子がいやになったから

エ 縁もゆかりもない異国の地へ成り行きで来たことをふいに後悔こうかいしたから

オ 今までこの地に馴染もうとしてきたことがばかしく感じられたから

2——線②「真っ直ぐ家に帰るのが勿体無いという気持ち」とありますが、「私」はなぜこのような気持ちをいだいたのですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 異国の地であるのに故郷の懐かしさを感じられるような不思議な気配を感じたから

イ 観光客と同じようにただ良い所だけを見て楽しむ日があってもよいように感じたから

ウ 故郷を遠く離れてがんばっている自分をなぐさめてあげようと思いついたから

エ 故郷の地では感じられないような神秘的な空気を存分に味わいたいと思ったから

オ 日々の生活に追われて忘れていた芸術への情熱を思い出すことができたから

3 — 線③「ほっとした」とありますが、「私」はなぜこのように感じたのですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 観光地というだけではなく、実際に生活できる地であることが分かったから
イ 親子の姿にかつての自分の姿をどことなく重ねて見ることができたから
ウ 国や民族がちがっても親子の情愛は変わらないものだと感じたから
エ 自分と同じようにこの地で日々を過ごしている人々がいると実感できたから
オ 親子の姿を見て、あくせく働かなくても生活が成り立つことが分かったから

4 — 線④「初めてのキリギリスの羽音」とありますが、「私」は「初めてのキリギリスの羽音」をどのようなものだと感じていますか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で書きなさい。

ア 過去の自分を思い出させるもの
イ 親しみを感じさせるもの
ウ 孤独感を強めるもの
エ 心をほぐしてくれるもの
オ この街と自分をつなげるもの

5 — 線⑤「異国人であるという負担」とはどのようなものですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 文化や風習、価値観のちがいによって生じる違和感や疎外感
イ 宗教観や感性のちがいなどによって感じられる優越感
ウ 生活習慣や考え方のちがいから発生する嫌悪感や劣等感
エ 芸術に対する態度や評価のちがいから生まれる障害
オ 民族をこえて文化・芸術を理解しようとする緊張感

6 — 線⑥「その言葉の意図を捉えられなかった」とありますが、それはどういうことですか。次の（ ）にあてはまるかたちにして具体的に説明しなさい。ただし、「言葉」と「行動」ということは必ず用いること。

（ A 二十字以内 ） けれど、 （ B 二十五字以内 ） ということ

（下書き用）

B				A		
と い う こ と						
	20					
				け れ ど、		
						16

7 — 線⑦「『コオロギ』という固有名詞で片付けられてしまう」とありますが、これはどういうことですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

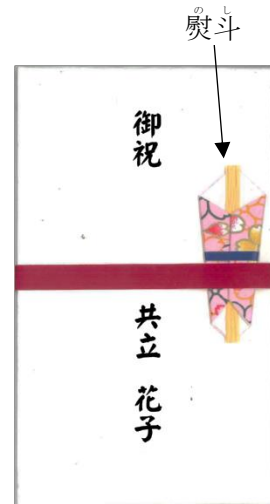
- ア 羽音をさせる虫は秋のおとずれを告げる虫として親しまれているということ
- イ 秋に羽音をさせる虫はすべてひとくりにされているということ
- ウ 秋の虫として「コオロギ」がもっとも有名であるということ
- エ 「コオロギ」などの羽音をさせる虫がきらわれているということ
- オ 秋の訪れを告げる虫はすべて神聖なものとして大切にされているということ

8 — 線⑧「嬉しいことでもある」とありますが、どのようなことが嬉しかったのですか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 美しいものに興味がないはずの夫が「私」のことを思っておくり物をしてくれたこと
イ 美意識の高いイタリア人である夫が「私」の感性や才能を高く評価してくれたこと
ウ 「私」の意見に反対していた夫が表面上だけでも「私」に歩み寄ってくれたこと
エ 異国の地で孤独を感じていた「私」に夫がよりそいながら励^{はげ}ましてくれたこと
オ 異国人として生きる「私」の感性を夫が理解しようと努め、共感してくれたこと

4

次の文章は、資料の中に挙げた「熨斗」に関するものです。文章を読み、後の問いに答えなさい。



資料

(小笠原流札法による生徒作品)

「熨斗」と聞いてすぐに熨斗の姿を思い浮かべることができますか？ ご祝儀袋の右上に付いているものがいわゆる「熨斗」です。贈りものを購入したとき、店員の方に「熨斗紙をお掛けしますか？」と尋ねられたことがあるかと思います。熨斗紙とは水引と熨斗の図柄が描かれた紙全体のことを指し、熨斗とは、右上に描かれた小さな飾り単体のことを示します。熨斗紙の場合、主役は水引ではなく、熨斗なのです。ちなみに、熨斗が描かれていない水引のみの紙は「掛け紙」と言います。

実は、熨斗は全ての贈りものに付けるものではありません。①付けて良いとき、悪いときがあります。

贈りものは「贈答品」や「進物」などの呼び方がありますが、古くからこれら進物には熨斗が欠かせない存在でした。

『定本柳田國男集 第十四巻』（柳田國男 著／筑摩書房）の「のしの起源」の項にはこのようにあります。

②

人々に我々が物を贈るとき、必ずノシといふものを添へることは、暫く日本に滞在した外国人ならば皆知って居る。しかし其起りとかもとの趣意とかを尋ねようとすると大抵の日本人にはもう説明が出来ぬやうになりにかけて居る。

『のしの起源』柳田國男

柳田國男が生きた、明治、大正、昭和前期には、すでに大抵の日本人が熨斗を説明できなかったと言うのです。そしてそれまで、あまりにも普通で当たり前のものであった熨斗が時代の変化にともない^注形骸化して、大切な文化の意味が途切れてしまったと続いています。それでも完全に無くならず、今に残っている熨斗には日本人が大切にしてきた何か秘められているのではないでしょう

か。

熨斗はおめでたいときだけのものではありません。お中元やお歳暮はおめでたいものでなくても熨斗紙を掛けます。熨斗とは真心のこもった贈りものの印なのです。お見舞いの進物や^注金封には、「のし」伸ばす」という言葉のイメージから「病気を引き延ばす」を連想させるので、熨斗を付けないことが今では一般的とされていますが、本来はお見舞いの種類によっては熨斗をつけて良いのです。

それでは真心のこもった贈りものの印とはどのようなことでしょうか。少しずつ掘り下げてみたいと思います。

熨斗をよく見てみると、折られた紙に、黄色く細長いものが包まれています。実はこれは、鮑の代用品として用いられているものです。そう、高級で美味しい貝の鮑です。もともとは、本物の鮑が包まれていました。本物の鮑といっても生ではなく、乾燥させて^{うす}薄く伸ばした鮑を用いており、一般には「のし」と称されていますが、本来は「熨斗鮑」が正しい呼び方です。

へ ③ A 熨斗とは、柄の付いた底が平らな焼物の容器に炭火を盛り、その熱で衣類の皺を伸ばす道具でした。今で言うところのアイロンのことです。④ a 「は火で伸して押さえ温めるという意味で、④ b 「はひしゃくのことです。「火熨斗」とも言われます。鮑を薄く伸ばす「伸す」と「熨斗」の言葉が重なり「熨斗鮑」と定着したよう

です。贈りものに「鮑」とは少し不思議な感じがするかもしれませんが。その背景には「ナマグサ」の考え方が

あります。日本では古くから、新鮮な山海のものを神様に捧げる風習があり、私たちの暮らしの中でも「美物進上」と言われ、美物とは魚や鳥のことで吉事の際は欠かせないものでした。これらが「生ぐさいもの」ナマグサです。現在でも結婚披露宴ではお刺身やステーキなど魚やお肉類をいただくのも、大相撲の優勝力士が両手に大きな鯛を持つのも、吉事にはナマグサが欠かせないからなのです。

逆に凶事とされる、人が亡くなったときには、宗教や宗派によっても異なりますが、魚や鳥などの肉類を避けて野菜や豆類を調理

した精進料理が並びます。このように、「ナマグサ」は吉事と凶事を分ける存在なのです。

ナマグサの代表とされたのが鮑です。本来は熨斗鮑が使用されていましたが、段々と簡略化された熨斗となり、そして印刷された熨斗となっていくのです。

なぜ鮑がナマグサの代表となったのかというと、鮑には不老不死の願いが込められているからです。中国から伝わった伝説に「九穴のアワビ」があります。それを食べると永遠の生命を授かるとされる幻の鮑の話です。通常の鮑の貝には表面に呼水孔と呼ばれる穴が四個から五個ありますが、どうも穴が九個ある鮑が存在すると言うのです。

永遠の生命を運んでくる海の波、それは常世の波と呼ばれますが、古代日本人はるか東の海の彼方から常世の波が打ち寄せてくると信じていました。注3 天照大御神は、伊勢の国は常世の波が幾重にも寄せてくる立派で美しい国なので、伊勢神宮に注4 鎮座されると決めたのです。鮑が豊富に獲れることでも有名な伊勢の海。このように、鮑は永遠の生命を願う不老不死の象徴なのです。伊勢神宮の神宮徴古館に隣接する神宮農業館には鮑の展示があり、このように述べられています。

⑤ 贈り物の「のし」はアワビを干したのをを用いるのが正式です。清浄さと不老長寿を祈ってのシンボルです。

熨斗を吉事の「おめでたいときにつけるもの」と考えるのは間違いはありませんが、おめでたいもの一択ではないことが分かります。根幹となる考え方は「この贈りものは、あなたの健康（不老長寿）と幸せを願って、真心をこめた清らかな品物である」という相手を想う心の現れなのです。そのシンボルとして熨斗が付けられるのです。

— 中略 —

現在では、金封や熨斗紙の右上に脇役のようにさり気なく付けられる存在になっていますが、本来は贈りものとしての主役だったのです。

貴いものであった熨斗鮑の名残を今でも端々に見ることがができます。昔は莫産やむしろの上で鮑を伸したので、熨斗鮑には「熨斗目」と呼ばれるゴザ模様の跡が残りました。現在も結納品などで使用される塩化ビニール製の代用品にも、しっかりと刻まれた熨斗目を見て取ることができます。また一説には、通貨であった大判小判の表面にも横に走る模様が刻まれてありますが、こ

れも熨斗目、へ③Bへゴザ目の跡だとも言われています。「のし」と一筆で書かれたものは鮑を剥いた带状の形に由来するなど、現在でも熨斗鮑の面影を感じることが出来ます。

時代を遡^{さかのぼ}って熨斗のあゆみを見てきましたが、もともと鮑は常世の波が運んできた不老不死のシンボルで、神様へ捧げる神聖なお供えものでした。お供えもの、それこそが真心のこもった清らかなる「神様への贈りもの」であつたのです。

時代とともに、贈答様式が様々に変化しそれに伴^{ともな}って慰斗のあり方も変わってきましたが、いつの時代も相手を想いその心を形として表してきました。これからもう少しづつ変化を続けながら、しかし、⑥本来の意味を絶やさずに継承^{けいしょう}していくことが必要だと思います。

(長浦 ちえ『結び、祈る、贈る、日本のかたち 日本水引』誠文堂新光社による)

注1 形骸化 〓 実質的な意味や機能が失われ、形だけが残る状態

注2 金封 〓 冠婚葬祭の際に金銭を包むために用いられる封筒、または折り紙

注3 天照大御神 〓 伊勢神宮に祭られている最も位が高い神

注4 鎮座 〓 神様が一定の場所にしまっていること

注5 結納品 〓 婚約成立のしるしにとりかわす品物

――線①「付けて良いとき、悪いとき」とありますが、「付けて良いとき」としてふさわしいものを次の中からすべて選び、記号で書きなさい。

ア お世話になってきた恩師にお歳暮を贈るとき

イ 退院する人が快気祝いを贈るとき

ウ 結婚式でご祝儀をお渡しするとき

エ 人が亡くなった際にお香典を包むとき

2 「②」の部分からどのようなことがわかりますか。その説明としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 明治時代にすでに、「贈答品」や「進物」を送る際に熨斗を使うことがまれてあったこと
イ 熨斗の本来の意味はかなり以前から忘れられたまま、熨斗紙が使い続けられていたこと
ウ 熨斗の重要性はますます軽^{かる}んじられるようになり、尊い文化の断絶^{あや}が危ぶまれていたこと
エ 近年は明治、大正、昭和と受け継^つがれてきた文化が近年再び注目を集めるようになってきたこと
オ かつての日本人は、熨斗のもとの意味を理解して正しく熨斗を使用し、贈り物をしていたこと

3 へ ③ A へ ③ B へ にあてはまることはとしてふさわしいものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で書きなさい。

ア ところが イ すなわち ウ それとも エ そもそも オ ともかく

4 ④ a ④ b に当てはまる漢字一字を文章中からぬき出して書きなさい。

5 線⑤「贈り物の『のし』はアワビを干したのを用いるのが正式です。」とありますが、なぜですか。その理由としてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア アワビにまつわる、食べると永遠の生命を授かるという伝説にあやかるため
イ アワビは日本近海で豊富に獲れ、伊勢神宮に供えられる海産物であるため
ウ アワビは魚や鳥を避けて神様に捧げものをする際に大変重宝されていたため
エ アワビは手軽に乾燥させて薄く伸ばすことができ、贈り物に付けるのに便利だったため
オ アワビを剥いた带状の形は縁起^{えんぎ}がよく、脇役として熨斗紙に添^そえるのにふさわしかったため

6 線⑥「本来の意味を絶やさずに継承していくことが必要だ」とありますが、これはどういうことですか。次の文の（ ）にあてはまるかたちにして説明しなさい。

熨斗はもともと、（ A 二十五字以内 ）であった鮑を起源としており、贈り物に熨斗を付けることで、（ B 二十字以内 ）べきだということ

(下書き用)

[illegible]

7 この文章の構成を説明したものとしてふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で書きなさい。

ア 柳田國男がすでに指摘していた問題を引用しながら、熨斗が今でも贈り物に付けられていることに疑問を投げかけ、現在の社会の価値観に則した新しい贈り物の文化を提唱している。

イ 熨斗を付けるのにはふさわしい場面とふさわしくない場面があることを対比しながら、なぜ贈り物に熨斗をつけないければならないのか歴史的な経緯けいゐを追って解説している。

ウ　熨斗紙がどのような場面に使われているのかを解説し、言葉の由来にふれながら、なぜ鮑が熨斗となったのかを説明することで、その価値を伝えている。

工 熨斗がどのように作られているのか、工程をくわしく説明したうえで、正しくはどのように使われるべきかを明らかにしながら、誤解されている現在の使われ方について批判している。

オほとんどの人が正確に理解できてはいない熨斗の歴史を、いにしへの伝承からひもとき、現在の形になるまでどのように発展したのかを解説するとともに、熨斗の新しいあり方を示している。

(問題はこれで終わりです)